北方山草（38）：23-27. March 2021

道東における毒草バイケイソウの食文化

札幌市　姉帯　正樹

はじめに

北海道の名付け親として著名な松浦武四郎（1818-1888）は、6度に亘る蝦夷地調査で『十勝日誌』『知床日誌』など数多くの記録を残した。これまでに筆者はそれらを精査し、武四郎が食した植物約30種を取上げ、本草学的知見を取り入れながら紹介してきた（保科2020）。その文献調査の過程において、毒草として知られるバイケイソウが「エトロフにては喰候由」と記載されている一文を見つけ、喜びの声を上げた。このような食経験事例を20年以上に亘って探し求めて来たためである。以下、筆者がバイケイソウ類の食文化に関心を持つ切掛けとなったテレビ番組から話を始めたい。

NHKで紹介されたバイケイソウの食文化とその後の騒動

時は1994年5月に遡る。以下、5月17日付道新スポーツの記事を要約して引用する。

14日夜7時半からNHKが放映した「北海道中ひざくりげ」で、女性アナウンサーが地元の山菜愛好家2人と根室管内中標津町の自然などを紹介した。その中で、愛好家が15cm程のバイケイソウの若芽を手に取り、「酢の物にして食べる」とコメントした。放送終了後、視聴者から釧路放送局に「食べて死ぬような毒ではないが、誤解を招くのでは・・・」と指摘する電話があった。

同局は放映前に釧路市立博物館の副館長から「大丈夫」との確認を取っており、15日朝にも再放送した。念のため同副館長に再確認したところ、「毒の成分は含まれているが、量や季節などに気をつければ大丈夫で、地元の『野草の会』のメンバーらも食べている」との答だったが、「一般の人は食べない方が良いと判断」。15日夜と16日朝に食べないよう視聴者に注意を呼びかけ、配慮が足りず誤解を招いたことを詫びるスポットを全道放送した。

上記記事より扱いは小さかったが、本件は16日付読売新聞、毎日新聞夕刊、北海道新聞夕刊、北海タイムス夕刊でも報道された。読売新聞によると、同博物館は「少しでも山菜採りの経験があれば、毒草なのは常識。放送の前に正式名を尋ねられた際、毒草だと説明したのに」、同局放送部長は「同行した山菜愛好家は専門家でなかった。チェックが行き届かず、反省している」と話したという。当時、北海道立衛生研究所において山菜や毒草を扱っていた筆者に取材申込はなかったが、北海道保健環境部食品衛生課及び取材を受けた北海道大学農学部附属植物園に本州の中毒事例、成分等の資料を提供した。2003年4月には、同局の求めに応じて植物のカラー写真9コマを貸し出し、当時の新聞記事を提供した。本騒動以降、筆者は“毒草の食文化”を研究テーマの1つに加え、文献を集め始めた。

新たな文献を求めて

バイケイソウは数多くの山菜図鑑に毒草と